

護セラルヘキモノニシテ、之ヲ一片ノ法令ニ依リテ突如生活ノ基礎ヲ失ハシムルカ如キ事アラムカ、決シテ妥當合理ノ措置ト云フヲ得サルヘシ。況ンヤ右ノ措置ノ結果カ主トシテ特定少數ノ個人又ハ團體ノ利益擁護ニ終ルカ如キモノナランニハ、公正ノ原則ニ反スト云フモ過言ニアラサルヘシ。

五、以上蘭國代表ノ口上書ノ要綱ニ對スル日本代表部ノ所見ヲ開陳セルカ、曩ニ日本首席代表カ會商開始ニ先チ總督閣下並ニ蘭國首席代表ニ提示シ最近公文書トシテ蘭國代表部ニ送附セル會商ノ根本原則四個條モ、亦實ニ右所見ニ基クモノニ外ナラス、從テ兩國代表ニ於テ茲ニ披瀝セル基礎の原則ニ關スル双方ノ所見ヲ吟味攻究シ、更ニ一段ノ諒解ヲ遂ケテ、始メテ具體的ニ各個特別問題ノ討議ニ移ルコト自然ノ順序ナルヘシ、從テ各箇別ノ問題ニ付日程ヲ討議スルコトハ未タ其時期ニ非サルヘシト思考ス。

第五章 一般委員會

一般委員會ノ論戰

以上デ大體ノ意見交換ハ終ツタ。和蘭政府ガ純經濟問題ニ交渉範圍ヲ局限スルニ決シタコトハ、筆者トシテ頗ル不本意デハアルガ、同政府ガ此決定ヲスル迄ニハ日數カラ考ヘテ、充分ノ考慮ヲ拂ツタコト、思ハレルシ、先方ガ現在以上ノ保障ハ不要ダト云フノニ、當方ガ餘計ナ差出口ヲスルニモ當ラヌ。而シテ經濟的見地ヨリスル双方ノ主張乃至通商條約ノ解釋ニ關スル双方ノ意見ガ全然相違シテ居ルノハ最初カラ判リ切ツタコトデ、歩ミ寄りヲセヌ限リ話ノ纏マリ様ハナイ。我々ハ夫ノ四大原則ガ其儘先方ニ受入レラレルダロウ杯考ヘタコトハ無イノデ、之ヲ出シタノハ先方ノ自覺ヲ待ツ爲メノ時間ヲ得ルノガ主タル目的ノ一ツデアツタガ、未タ其鼻息ハ頗ル荒イカラ、今少シ假スニ時ヲ以テスル必要ヲ認メタ。一般委員會ニ於ケル筆者ノ言動ハ總テ此見地ニ基イタモノデ、其經過ハ次ノ通りデアル。

一般委員會ノ第一回會議ハ六月二十六日朝會議場タル藝術協會テ開カレ、先ツ「ランネフト」代表ハ日蘭兩代表部ガ茲ニ會同商議スルニ至レルコトニ付謝意ヲ表シタ後、和蘭側口上書所載ノ通り蘭印產品ノ輸出先タル歐洲各國ハ不景氣ニ對應スヘク新貿易政策即チ「バクター」制ヲ敢行シ同國品ノ販路ヲ確保セント欲シツツアリ。又蘭印ニ於ケル輸入市場ハ絶エヌ變動スルモノナルカ故ニ、速ニ本會商ヲシテ満足ナル結果ニ到達

セシメンコトヲ欲スルモノナリ。而シテ此目的ヲ達スル爲ニハ先ツ（イ）輸入及輸出ノ相對的狀況並ニ貿易「バランス」調整ノ可能性ヲ審査スヘキ委員會及（ロ）日本人ノ利害關係ニ付攻究スヘキ委員會ヲ開設シ、此等諸問題ノ討議ヲ行ヒタル後、諸種ノ根本的論點ニ及フコトヲ可トスル旨ヲ述ヘタ。

右ニ對シ筆者ハ先ツ蘭側代表ノ歡迎ノ辭ニ應ヘタル後、

一、六月二十三日蘭代表宛送付セル我方提案及六月八日日本代表ニ手交セラレタル蘭代表口上書ニ對スル同月二十五日附蘭代表宛我方回答ニ依リ、蘭側ニ於テハ日本側ノ懷抱スル見解ヲ充分了悉サレシ事ト思考スル處、右提案及回答ニ包含セラルル所ハ、日蘭兩國間ニ存在スル永年ノ友好善隣ノ關係ヲ將來益々緊密鞏固タラシメントスル趣旨ニ外ナラサル次第ナルカ、二十三日貴代表ヨリ受領セル前述ノ我方提案ニ對スル回答ヲ閱讀スルニ、何等カノ誤解アルヤニ思考セラルルニ付、此機會ニ於テ一言我方提案ノ趣旨ヲ説明致置度シ。

二、蘭側ノ意見ニ依レハ我方ノ提案ハ結果ヲ構成スヘキモノニテ會商ノ初期ニ爲サルヘキモノニ非ス、殊ニ不必要、又望マシカラサルモノナリ、然シ日本側ノ見解ノ表彰トシテ之ヲ論議スルニ吝ナラサルニ付蘭側提案ト同時ニ研究セント云フニ在リテ、此見解カ我方ノ夫レト大ニ懸隔アルヲ遺憾トス。我々ノ見解ニテハ當方ノ提案セル四大原則ハ日蘭條約ヨリ生スル當然ノ歸結ナルカ故ニ、萬一此四大原則ニ於テスラ意見ノ相異アルニ於テハ、之ヲ明カニセスシテ假令細目ノ協議ニ入ルトスルモ、必スヤ混亂ヲ惹起シ誤解ニ次クニ誤解ヲ以テシ、會商ハ徒ニ紛糾ヲ重スルノミナルコト明カナルニ付、豫メ大原則ヲ協定シ、之ヲ基幹

トシテ商議ヲ進メント欲シタル次第ニ外ナラス。從テ之カ宣言ナリヤ決議ナリヤト云フカ如キ形式ノ問題ハ日本側ノ重要視スル所ニ非ス。但シ此原則ノ列記カ何時效力ヲ生スルヤノ問題ハ協議ノ上決セラルヘキ事ニテ、蘭側カ細目協定成立ノ上ニ非サレハ發効セシメ難シトノ意向ナルニ於テハ、我方ニテ強テ之ニ反對スル意向ナシト雖、細目協定ハ畢竟時局ニ善處スル爲ノ經過規定ナレハ其存續期間ハ極メテ短カカルヘキニ反シ、此原則ハ日蘭通商條約ヨリ生スル當然ノ歸結ナルヲ以テ期間ヲ限定セサル協定トスルコト條理ノ命スル所ナリ。而シテ蘭側ノ意見ニ依ルモ第三項ヲ除キ其他ニ付テハ主義上同感ナルヲ知り日本代表部ハ頗ル欣快ノ感ヲ禁セサルヲ得サル次第ナリ。

三、我方提案第一號ニ付行文ノ文字ニ面白カラサル點アラハ、我々ハ之ヲ修正スルニ吝ナラス。

第二號ニ付テハ蘭側ハ全然同感ノ意ヲ表サル。抑々本號ハ永久的ノ性質ヲ有スルモノナルヲ以テ、嘗ニ今回ノ會商ニ止マラス、四圍ノ事態ノ變化ニ伴ヒ隨時會商ヲ爲サン事ヲ豫見スルモノナリ。嘗テ本會商發會式ノ當日予ノ述ヘシ如ク、國交ハ永久的ノモノナルニ反シ通商關係ハ時ニ依リテ變化シ得ルモノナルヲ以テ、永年間對日貿易關係ニ於テ出超ノミヲ續ケ來リシ蘭印カ此何年間カノ反對狀勢ニ刺戟セラレ會商ヲ提議セシト同シク、形勢一變ノ場合日本亦同様ノ會商ヲ提議セサルヲ保セス。然ルニ之ヲ拒絕セラルルニ於テハ日本ハ一方的ニ義務ノミヲ負擔スルコトナリ、右ハ我々ノ承認シ得サル所ナリ。

第三號ニ關シ貴方ハ明白ニ不承諾ノ意ヲ表明シ、本號カ恰モ通商條約ノ規定以上ニ互ルカ如キ意見ヲ聞クハ日本代表部トシテ極メテ意外トスル所ニシテ、特ニ本號批評ノ末項ニ The Possibility that in some cases

by these measures interests of one country may be more materially involved than those of others can in no way modify this liberty to記載シアルモ、或種ノ措置ヲ取ル結果之カ爲ノ利益ヲ蒙ルモノハ何國ナリヤヲ知リ乍ラ、敢テ此種ノ措置ヲ取ルモ其國ノ自由ナリトノ言ヲ聞クニ至リテハ、日本代表部ノ到底承服スルヲ得サル所ナリ。條約ハ何ノ爲ニ結ビ、將又最惠國約款ハ何ノ爲ニ挿入セラレタルヤ、條約ヲ結フ動機ハ常ニ條約國主權ノ自由行動ヲ制限センカ爲メナリ。若シ條約アルニ拘ラス之ヲ無視シテ一國主權ノ發動ヲ絶對ナラシムルモ不可ナシト主張シ得タリシナラハ、日本ハ和蘭ト結ヘル不對等條約ヲ極メテ簡單ニ片付ケ得シナルヘシ。條約ニ對スル我々ノ信念ハ之ト異リタレハコソ治外法權撤廢ノ爲ニ二度迄モ條約改正ヲ爲ス苦辛ヲ經タル次第ナリ。若シ夫レ蘭側ニ於テ最初ヨリ日本ノ利益ヲ損傷スル意思ヲ有シ、此損傷セラレタル利益ヲ他國ニ充當シテ其満足ヲ買ハントスル意圖ニテ會商ヲ希望セラレシナラハ、九千萬ノ日本國民ハ極端ナル失望ヲ以テ本會商ヲ迎フヘシ。

第四號ニ關シ蘭側カ其根本ニ於テ我提議ニ反對ナラサルヲ知り欣快ニ堪エス。我々ハ毫末モ蘭側ノ措置ヲ批評スル意思ヲ有セス。將又其措置ニ干涉スルノ意思ナシト雖、世界的恐慌ニ處スル爲ニ昨年來蘭印官憲ノ執リ來レル措置ハ總テ消極的ナルヤニ思ハル。私見ニ依レハ此種難局ニ處シテ之ヲ切り抜ケ得ル唯一ノ手段ハ積極的ノ方針ヲ定ムルニ在リ。此意味ニ於テ永年間ノ親交ヲ思慕スル日本ハ、蘭印側ニ於テ積極的ニ蘭印諸地方殊ニ外領ニ於ケル未開發ノ地ニ産業開拓ノ意アラハ一臂ノ努力ヲ捧ケント決心シ、之ニ日本ノ資本又ハ勢力ヲ參加セシメ、蘭印ノ福祉ノ爲ニ將又共存共榮ノ爲銳意協力センコトヲ申出タルニ過キサ

ル次第ニシテ、要之本號ハ單ニ主義上ノ規定ニ止マリ、其細目ニ至リテハ其都度關係者間ニ協議セラルヘキモノナレハ、本號ハ蘭側ヨリ寧ロ進ンテ提議セラル可カリシモノト我々日本代表部ハ考ヘ居タル次第ナリ、而シテ日本側カ積極的協力ヲ慫慂スル所以ノモノハ、獨リ將來ニ關スルノミナラス、現在ノ情勢ニ於テモ日蘭當業者ヲシテ共存共榮ノ原則ニ從ヒ利害調整ノ目的ヲ以テ協力ノ實ヲ舉グル爲隔意ナキ協議ヲ遂ケ、以テ双方ノ利益増進ノ結果ヲ招來セシメンコトヲ希望スルノ意圖ヲ有スルモノナルコトヲ茲ニ附言セント欲ス。

四、終ニ臨ミ一言シ度キハ貴方提出ニ係ル口上書ハ餘リニ抽象的ナル爲、我方トシテハ問題ノ重點ヲ捕捉スルニ頗ル苦シミ居レルヲ以テ、該口上書ノ包容シ居ル所ヲ具體的ニ列記シ、成ルヘク速ニ當方ニ提示セラレンコトヲ希望ス。

次テ「ラ」代表ハ日本代表部ハ和蘭代表部ノ提議セルニ委員會ノ設定ニ反對アリヤヲ質ネタカラ、筆者ハ主義上異存ナキモ、モット適當ナル機會到來セル際之ヲ討議シ度シト答ヘシ處、「ラ」ハ日本首席代表カ主義上蘭側提議ヲ受諾セルヲ謝スト共ニ、二委員會問題ノ討議ニ先タチ六月二十五日附日本側口上書記載ノ諸原則ニ付テノ討議ヲ行フヘシトノ日本首席代表ノ提議ニ關シ、會合ノ上之ヲ討議スルニ異存ナキモ、根本原則討議ト同時ニ客觀的事實ノ討議モ始メ度シ、本會商招請ノ主タル目的ハ蘭印政府計畫中ノ新制限措置ニ付兩代表カ討議セントスルニ在リ、即チ此等ノ措置ハ本會商ノ爲ニ延期セラレタルモノナルヲ以テ、若シ本會商ニ於テ此等ノ措置ノ討議行ハレストセハ延期ノ目的ハナクナリ、從テ和蘭政府ハ早速右措置ヲ實施セサルヲ得

ヌ、依テ閣下ノ「ジャヴァ」視察旅行出發前ニ委員ノ任命並ニ原則及具體的事實ノ討議ヲシ度ク、之カ爲明
二十七日一般委員會ノ開催ヲ望ムト述ヘタ。

右ニ對シ筆者ハ屢々蘭側ヨリ既ニ實施準備ノ出來上リ居ル他ノ諸法令ヲ有スルモ、會商開催サルル爲其實施
ヲ延期シ居ル旨聞取レルカ、此ノ如キコトヲ繰返スコトハ會商ノ成功ニ資スルモノト思考セヌ。日本人ハ正
義ノ前ニ怯懦ナルモ脅迫ノ前ニ一步モ退カヌ國民デアル。若シ本會商不成功ニ終ラハ蘭印ハ新ナル法令ヲ公
布ストノ方針ヲ保持センカ、全日本國民ハ恐ラク寧ロ不成功ニ終ランコトヲ希望スルナラン。吾人ハ此如キ
雰圍氣ノ裡ニ在ルカ故甚タ容易ニ決心ヲナシ得ル立場ニ在リ。然シ一國ノ代表トシテ相手方カ理不盡ノ申出
ヲ爲ス場合之ヲ其儘受入レテ國交ノ障害ヲ起ス如キコトハ出來得ル限り阻止スヘキデ、初頭ニ述ヘシ如ク國
交ハ永久、通商關係ハ時ト共ニ變化スルモノナレハ、此一時的發作ノミヲ見テ大局ヲ捉ヘ得サルハ餘リニ近
眼的ナリ。故ニ吾人ハ此大局觀ヨリ兩國ノ和親共存共榮ヲ増進セシムル必要アリ、貴方モ亦此覺悟セラレン
コトヲ欲スト強調セル處。蘭側代表ハ之ニ對シ一言辯明シ、自分ハ決シテ脅迫的意思ヲ以テ述ヘタルニ非
ス、具體的討議ヲ急グ所以ハ蘭印市場ノ變化ヲ憂フルカ爲ナリ、而シテ原則ヲ議スルゴトニ勿論異議ナキ
モ、具體的問題ヲ議セスシテ原則ノミヲ議スルハ決シテ問題ヲ解決スル所以ニ非スト返シタルニ付、筆者ハ
更ニ成ル程歐洲ハ難局打開策トシテ種々ノ措置ヲ取レルモ、蘭印ニ於ケル制度ノ如キ極端ナルモノハ未タ其
例ヲ見ス、吾人ハ歐洲諸國カ採リ居ル措置カ果シテ世界ノ福祉ニ貢獻シ彼等自身ノ經濟的基調トナルヤ疑問
トス、現ニ米國ニ於テハ歐洲諸國ノ採リ居ル措置ハ却テ世界經濟不況ヲ惡化スルモノナリトナシ居ルコトヲ

指摘シタル後、兎ニ角小委員會ヲ開クヘキヤ否ヤハ明日返答スヘシト告ケタルニ、蘭側代表ハ明日ハ單ニ蘭
側提案ノ小委員會設置ニ關シ討議セントスト主張セルヲ以テ、筆者ハ原則問題ニ關シテ言及スルノ自由ヲ留
保シタ。

斯クシテ一般委員會ノ第一回會議ハ終ツタ。翌二十七日ノ第二回會議ニ於テ先ツ筆者ヨリ昨日ノ委員會ニテ
蘭側代表カ蘭印政府ノ既ニ執リ又ハ執ラントスル諸措置ハ何等現行日蘭通商條約ノ最惠國條款ニ抵觸セサル
旨ヲ主張サレタガ、日本代表部ハ之ニ同意スルヲ得ヌ。前年佛國カ實施セル「クオート」制ニ關シ英佛兩國
間ニ大ナル論爭アリ、右論爭ハ遂ニ條約ノ廢棄ヲ惹起シタ。日本代表ハ此制度カ既ニ世界各國ニ認メラレタ
原則ダトノ主張ニハ強硬ニ反對ス。日本代表部ハ日本ノ必要トスル物資ヲ蘭印ヨリ購入スルノ用意アル旨表
明セルガ、之ニ對シ蘭首席代表ハ昨日ノ演說中ニ貿易調節ノ爲ニハ日本モ亦必要原料品ヲ蘭印申出ノ物資ニ
依リ調節スヘキナリト論シタ。日本所要ノ物資ノ何タルヤヲ述フルニ先タチ特ニ注意ヲ惹キタキハ、「ナポ
レオン」戰爭中外國貿易ノ杜絶ニ依リ苦酸ヲナメタ歐洲諸國カ、斯カル困難ヲ打破スル爲ニ大ナル努力ヲナ
シ、今ヤ其必要以上ノ物資ヲ生産スルニ至リ、和蘭スラ蘭印ヨリ該物資ノ供給ヲ欲セヌ程デアル。日本ニ於
テモ歐洲大戰中ノ經驗ニ依リ右物資ノ自給自足ハ國家ノ存立ニ缺ク可ラサルコトヲ自覺シ、爾來十數年間ノ
大ナル努力ニ依リ漸ク其目的ヲ達成シタ。然ルニ一國カ之カ爲困難ナル狀態ニ陥レリトノ理由テ日本ニ其重
要政策ノ拋棄ヲ求ムルカ如キハ、國際事情ノ現狀ヲ無視スルニ均シキモト云ハネハナラヌ。我々ハ蘭印カ日
本ノ必要トスル物資ヲ多量ニ生産スル様努力セラレンコトヲ望ムト共ニ、日本モ之ト協力スルノ用意ト意思

ガアル。「ランネフト」代表ハ昨日以來屢々蘭印政府ノ新制限措置ニ言及セラレタガ、日本代表部ハ双方ニトリ満足ナ協定ニ到達スル目的ノ爲ニ來タノデ、他ニ類例ヲ見ヌ既ニ實施中ノ諸措置ハ暫行的ノモノト考ヘ、我々ハ此等措置ノ廢止又ハ修正ヲ期待シテ居ル。蘭首席代表ハマダ此外ニ新規ノ制限措置準備セラレ居リ、唯蘭印政府ハ之カ實施ヲ延期シツツアル旨ヲ述ヘラレタガ。我々ハ此等新制限措置ニ關シ毫末モ和蘭代表部ノ憐ミヲ乞ヒニ來タモノテハナイ。我々ハ條約違反ナルト共ニ國際法ニ照シ不公平ナリト認メラルル既ニ實施中ノ此等措置ニ付商議スル爲ニ來タノテアル。昨日蘭首席代表提議ノ委員會ノ眞ノ目的ニ關シテハ、昨日ノ代表來翰ニ依レハ蘭側ニ於テハ右委員會ニ於テ今用意セラレ居リ未タ實施ニ至ラサル制限措置ヲ討議セントスル意向デアアルコト明カナレルガ、若シ然リトセハ日本國民ハ非常ナ失望ヲ以テ本會商ヲ迎フルデアロウ。日本國民ハ既ニ實施中ノ制限措置ヲ條約ノ規定ニ抵觸スルモノト看做シテ居リ、而シテ日本代表部ハ本問題ニ關シ抗議提起ノ爲且ツハ双方ノ受諾シ得ヘキ條件ニテ相互ノ利益調整方法發見ノ爲ニ來レルモノデアアルカラ、若シ蘭代表ノ意向ガ此等ノ措置ニ觸ルルヲ欲セヌモノテアルナラ、本會商ノ成功ハ之ヲ期待スルヲ得ヌ。卑見ニ依レハ新制限措置ハ本會商ノ失敗セル場合ニノミ實施シ得ヘキモノデ、若シ和蘭政府カ此等ノ措置ヲ實施スルノ完全ナル自由アリト思考シ且ツ斯カル事態ヲ惹起セハ、其全責任ハ和蘭政府之ヲ負ハサルヘカラスシテ日本政府ハ完全ナル自由ノ地位ニ置カルルモノナリト主張セルニ對シ。

「ラ」代表ハ委員ノ任命ニ關スル日本代表ノ決定如何ト質セルニ付、筆者ハ既ニ述ヘシ如ク偶々日本練習艦隊ノ蘭印訪問ノ爲メ越田代表ハ忙殺セラルヘク、其間ヲ利用シ自分ハ現狀視察ノ爲「ジャヴァ」主要都市訪

問ノ途ニ上リ、來月六日歸來シ度ク、從テ日本代表部ハ其間重要會合ヲ催フスコト不可能ナル所以ヲ述ヘ、自分ノ不在中ハ雙方代表部ノ專門委員會合シ、不明瞭ナル諸事項研究ノ上之ヲ明確ニスルノカ肝要デアアル、日本代表部ニ於テハ既ニ實施中ノ制限措置ノ沿革、日蘭印間輸出入貿易統計ニ付正確ナル説明ヲ得度ク、尤モ右專門家委員會ハ單ニ研究調査ニ止マリ、蘭印側提議ノ委員會トハ異ナル點ヲ明確ニシ置キ度シ。蘭側提議ノ委員會ニ關シテハ來月六日以後ニ於テ（一）何時ヨリ之ヲ開クヤ（二）討議事項如何（三）委員會ヲ如何ニ分科スヘキヤヲ先ツ決定シ度ク、其後ニテ本提議ニ對スル確答ヲ與ヘント述ヘタル處。

「ラ」代表ハ右陳述ヲ批評スル意向ハナキモ一言シ度シトテ、日本ニモ多年ノ經驗ニ依ル政策アリトノ説明アリタルカ、和蘭ニモ他國ノ爲ニ拋棄シ得サル政策アリ、又制限措置ニ關スル日本側見解ハ右措置カ全ク條約ノ範圍内ニ於テ行ハレタルモノナリト和蘭側ノ夫レト異ナルハ遺憾テアル、條約ハ雙方ニ有益ナラサル可ラス、若シ之カ締約國ノ一ヲ損傷スル場合ニハ最早其繼續ハ期待シ得ラレヌト酬ヒタカラ。筆者ハ斯クノ如ク解釋上ニ相違アル限り日本代表部ハ商議ヲ繼續スルコトカ出來ヌト述ヘ。「ラ」代表ハ本會商決裂ノ責任ハ毫末モ和蘭代表部側ニ存セヌト答ヘタ。

次テ兩者間ニ蘭側制限措置ニ關スル應酬ヲシタ後、筆者ハ專門委員會ノ目的カ事實ノ研究ニ在ルコト及右委員會開始ノ日取ニ付テハ雙方ノ首席專門委員會間ニ決定モラルヘキコトヲ主張シタ處、「ラ」代表ハ正式委員會ヲ本日任命シ、右委員會ハ之ヲ輸入輸出及海運ニ分類シ度シト述ヘタ。仍テ筆者ハ重ネテ日本側ノ意見カ蘭側ニ十分徹底シ居ラヌコトヲ指摘シ、專門委員會ハ單ニ事實ノ調査ヲナスノミデ、正式委員會ノ問題ニハ觸

レヌモノチアル、若シ蘭側ノ意見カ委員會ヲシテ未實施ノ制限措置ヲ討議セシムルニ在リトセハ、右ハ全然日本側見解ト異ツテ居ル、又船舶問題ハ本會商ノ討議事項テハ無イト云フタラ、「ラ」代表ハ正式委員會ヲ設クル場合ニモ之ヲシテ先ツ單ニ事實研究ノミヲ爲サシムヘク、此方針ノ下ニ正式委員會ヲ直チニ任命センコトヲ提議シ、筆者之ニ答ヘ論議ヲ重ネタ。

蘭側ハ暫時ノ休憩ヲ要求シ、同代表部内相談ノ上「ランネフト」代表ハ依然本日正式委員會ノ委員任命ヲシ度キ旨ヲ主張シ、輸入、輸出兩委員會ニ於ケル蘭側委員ノ氏名ヲ披露シタカラ、筆者ハ日本代表部カ事實ノ研究及輸出入統計ニ關スル情報入手ノ爲ノ専門家ノ會合ヲ提議セル點ヲ更メテ指摘シ、此會合タル委員會ハ之ヲ二箇ニ分類スルノ必要ナキ所以ヲ述ヘ、次テ本日中ニ委員任命ノ提議ハ妥協ノ精神ニ依リ之ヲ承認スルモ、此委員會ハ一時的ノモノナルコト、委員會ノ任務ハ輸出入等ノ統計ニ關スル事實ノ研究ニ止マリ、問題ノ本質ヲ討議スルノ權限ナキコト、日本側専門委員カ制限措置ニ關スル質問ヲ提起セハ和蘭側委員ハ之ニ回答スヘキコトノ條件ヲ充タスヲ要スト提議シ「ラ」代表終ニ之ニ同意ス。

用 語 問 題

斯クノ如クシテ一般委員會ハ終ハツタガ、此委員會中ニ起ツタ用語問題ニ關シテ一言スル。夫レハ第一回會議デ「ランネフト」代表最初ノ發言ニ對シ、筆者ハ自分ニ便利ナ佛蘭西語デ應酬シタ處、同代表ハ前掲議事規則ヲ盾ニ、之カ英譯ヲ要求シタ、無論先方當然ノ權利デハアルガ、蘭代表部ノ諸員ハ皆佛語ヲ了解シ得ル故、

此要求ハ主義ノ問題トシテ爲サレタモノト考ヘル外ハナイ。然ルニ我代表部テ通譯事務ヲ擔當スル長谷川副領事ハ佛語ヲ解セス、殊ニ筆者カ此機會ヲ捉ヘ日本語デ發言シ置クコトハ、後日委員會等ニ於テ我専門委員ノ日本語使用ニ先例ヲ作り、其行動ヲ容易ニスル所以デアルカラ、爾來筆者ハ一般委員會デ日本語ノミデ應答シタガ、其後七月十二日「ランネフト」代表ト會談ノ際、同代表ヨリ委員會デハ自分モ今後和蘭語デ述べ、之ヲ英譯サセタイト思フガ、貴方デ氣ヲ惡クセラレサルヤト質問シタカラ、筆者ハ毫頭斯クノ如キ懸念無用ト返事ヲシタ。尤モ其以來一般委員會モ亦總會モ開カレナカツタ故、「ランネフト」代表ノ留保ハ終ニ實行ノ機會ナクシテ終ツタガ、氏ト差向ヒノ會談デハ筆者ハ常ニ佛語ヲ使用シ、先方通譯ヲ要求セヌノミカ「ラ」代表自身辭書ヲ机上ニ置キナガラ不得手ノ佛語テ常ニ應對シタ。筆者ハ「ラ」代表ノ此殷懃ナル注意ヲ深ク多トスルコトヲ茲ニ特記スル。

「ラ」ト筆者ノ私談

一般委員會ノ第二回會議終了後「ラ」代表ハ筆者ト差向ヒデ話シタイト云フタカラ、何トカシテ今少シク彼ヲ覺醒サセル道ヲ講シテ見タイト思ヒ、之ヲ快諾シテ次ノ如キ談話ヲ交換シタ。

「ランネフト」代表ヨリ日本ノ新聞論調ハ恰モ日蘭間ニ戰鬪狀態存在スルカ如キ感想ヲ與ヘ甚タ穩ナラスト述ヘタルニ付、筆者ハ或ハ然ラン、日本人ヨリ見レハ蘭印ヨリノ入超ヲ何ノ妨害モ與ヘス放任シ居タル日本ニ對シ、近々五六年ニ過キササル事態ノ變化ニ對シ、蘭印カ昨年以来執リタル措置ヲ目シテ、日本人ハ蘭

印ヨリ經濟戰爭ヲ布告セラレタルモノト見テ居リ、我々モ此經濟宣戰ニ如何ニ對抗スヘキヤヲ研究シ、オ互ニ協議ノ爲ニ來リタルモノナリト指摘シタル處、先方ハ此制限令カ左程迄ノ刺戟ヲ與フヘシトハ思ヒ及ハサリシト云ヒタルニ付、本使ヨリ例ヘハ「キヤムブツク」制限令ニ關シ我々日本人ハ之カ僅カ五ノ和蘭會社ヲノミ利益セシムルモノニテ、此ノ如キ立法カ公正ナリト云フ觀念ハ到底日本人ノ懷キ得サル所ナリト答ヘタルニ、「ラ」ハ彼ノ「キヤ」ノ問題ニ付日本ニ此種ノ異議アルヤ、自分ハ「ライセンス」ノ問題ニ付テノミノ事ト考ヘ居レリト云ヒタルニ付、本使ハ決シテ然ラス、今迄ノ諸問題中殊ニ此五社ニ特別保護ヲ與ヘラレントスル法令ハ非常ナル非難ノ基礎トナリ居ル次第ナリト述ヘタルニ、「ラ」ハ之ニ付テハ日本人ノミナラス和蘭人モ又土民モ同様ナル被害ヲ蒙ムル次第ナルカ、貴官日本出發前ナサレタル「インターヴュー」トシテ日本新聞ニ現ハレタル記事ハ決シテ好感情ヲ以テ之ヲ讀ムコトヲ得スト云ヒシ故、夫ハ一體何ヲ意味スルト問ヒタルニ、今ヤ將ニ七千人ノ同胞ハ蘭印ヨリ驅逐セラレントシツツアリト述ヘラレタルコトナリ云ヒシニ付、本使ハ從來ノ制限令ハ和蘭五大會社ノ利益ノ爲ニ設ケラレタルト同シク、發令準備整ヘリト稱セラルル新法律案ハ支那人ノ利益ノ爲ニ日本人ノ利益ヲ犧牲トスルモノナリト日本人ハ思考シ居レリ。本使カ當地ニ來着以來親シク見聞スル所ニヨルニ、在住日本人ハ今ヤ頗ル悲愴ノ決心ヲ固メ、萬一新法令ノ發セラルル場合全部蘭印ヨリ撤退スルノ覺悟ヲ示シ居レリト述ヘタル處、「ラ」ハ七千モノ日本人ヲ驅逐セントスルカ如キ意思ハ決シテ蘭印政府ニハ無之、然シ支那人ノ大多數ハ人種ハ兎モ角國籍ハ蘭印ニ在リテ土人ト異ルコトナシト反駁セル故、本使ハ成ル程如何ニモ支那人ハ蘭印ノ國籍ヲ有ス

ルコトアランカナレトモ、同時ニ支那ノ國籍モ之ヲ保有シ居ルコト思ハル、彼等華僑カ莫大ノ金ヲ廣東其他ニ送り反日工作ノ資金タラシメシコトハ御承知ノ通ナルヘシト指摘シ、種々意見ヲ交換セリ。本使ハ斯ノ如キ次第故貴官カ屢々新制限令ニ言及セラルルヲ見テ自分トシテハ甚タシキ遺憾ヲ感スル次第ニテ、若シ夫ヲ其儘發表スルニ於テハ蘭印在留邦人カ如何ナル態度ニ出ツヘキヤ殆ント之ヲ豫期シ難ク、我々トシテモ、之ヲ調停スル能力ヲ缺ク惧アリ。就テハ今後此點ニ付充分ノ考慮アラン事ヲ希望スト述ヘタルニ「ラ」ハ始メテ其重大性ニ氣付キタルモノノ如キ印象ヲ與ヘタリ。更ニ「ラ」ヨリ本朝ノ會議ニテ閣下ヨリ日本ノ國策ヲ強調モラレシカ、蘭印ニモ同様ニ國策アリ之ヲ如何トモスル能ハスト云ヘルニ付本使ハ今朝ハ問題ヲ抽象的ニ述ヘシノミナルカ赤裸々ニ申サハ世界戰爭中、砂糖ノ缺乏ニ苦シメル諸國ノ狀態ヲ見テ日本ハ非常ニ反省スル所アリ、爾來苦心シテ自給自足ノ途ヲ講スルコトニ努力シ、三年前漸ク此希望ヲ達シ、明年ハ多少ナリトモ海外ニ其販路ヲ求メサルヲ得サル立場ニアリ、畢竟印度ニ於テ砂糖ノ栽培ヲ始めシ時以來、蘭印トシテ既ニ大ナル警戒ヲ爲スカリシニ拘ラス、在來其儘ヲ續ケシ結果不幸ナ狀態ニ陷レルモノニ他ナラス、之ニ付日本ハ大ナル同情ヲ有スト雖、唯今述ヘシ様ノ狀態ナルニ付、砂糖ニ關スル御希望ニ應スル機會ハ甚タ少ナシ、若シ何カ他ノ物資ヲト思ヒ到着以來種々研究シツ、アルモ、不幸ニシテ日本ノ希望スル規那皮ハ輸出ヲ禁止セラレ居ルト云フカ如キ狀態ナリ、貴方ニ何トカ名案ナキヤト諮問セル處、「コブラ」等ハ今少シ買ツテ貰ヒ度キモノト云ヒシ故、之ハ日本ニ滿洲大豆ガアルノデ、又「コブラ」モ南洋諸島ニ生産スルノデ甚タ氣ノ毒ナ次第ナリト答ヘタリ。

次テ「ラ」ヨリ自分モ九月ニハ總督不在トナルニ付總督代理ヲセネハナラズ、「ファン・ヘルデレン」教授モ凡ソ二ヶ月半位ノ見當ニテ來タモノテアルガ既ニ一ヶ月ヲ過キタ様ナ次第テ、出來得ル丈ケ會商ヲ早ク進メ度ト述ヘタルニ付、本使ハ自分トシテモ九月迄居様等ト思ツテ當地ニ來タ譯ニアラス、今迄遲延ノ原因ニ付テハ責任ハソチラニ在ルト云フコトヲオ忘レナラヌ様願ヒ度、成ル程總督トノ會見ノ時此問題ハ貴下ノ權限ナリト云ハレタ其通り今ハナツテ居ル、結果ヨリ見レハ正ニ其通りナルモ、貴代表部ノ權限ニ移スヘキヤ否ヤノ問題ニ付テ日本ノ提案カ如何ニ慎重ニ和蘭政府ヲ取扱ハレタカハ御承知ノ通りノ次第ニテ斯クノ如ク慎重ニ取扱フヘキ理由アリタレハコソ和蘭政府ニテ取扱ハレタノテアル、夫レニ付テ我々ハ些ノ批評モシナイ。又慎重審議ノ結果之ヲ貴代表部ニ移サルルニ至ツタコトニ付テモ異存ハナイノテアルカ其移サルル爲ニ時日ノ遷延シタコトニ付テ當方カ責任ヲ取ルヘキ理由ハ少シモ無イノテアツテ、今貴方ヨリ一ヶ月期間ノ經過ニ關シ當方ニ對シテ批評カマシキ態度ヲ取ラルルノハ頗ル心外ニ存スル次第ナリト述ヘ置ケリ。

東京テハ我々ノ苦心ヲ了解セス、六月二十七日來栖通商局長カラ木村顧問ニ左記ノ電報ヲ打ツテ來タガ、此時ニハ既ニ豫定通り專門家委員會ヲ開クコトニ成ツテ居リ、筆者ハ同顧問及三好秘書ト共ニ翌日カラ「ジャグア」ノ視察旅行ニ出掛ケダカラ、歸還ノ翌日即チ七月七日木村顧問ハ左ノ返電ヲ來栖局長ニ發シタ。

來電

屢次ノ御報告ニ依リ和蘭側ヲ「リード」セントノ御努力ノ程充分諒察シ居レル處、彼我聲明、口上書及之ニ

對スル双方ノ回答ヲ慎重檢討スルニ、先方ニ於テハ當方四大原則中大體ニ於テ第三項以外ノ三原則ニハ特ニ反對無キモノノ如キモ、第三項ニ關シテ主張スル條約論ハ容易ニ之ヲ覆ヘササルヘク、彼我各々其主張ヲ通サントセハ、和蘭側ハ或ハ日印條約ノ場合ニ於ケル如ク日蘭條約廢棄ノ舉ニ出テ來タルヤモ保シ難キ處、斯クテハ事態益々紛糾スルノミナラス本邦ニ取リ不利益ノ結果トナルヘキ惧レ之レアリ、省内ニ於テモ此點ヲ憂慮シ居レル向相當アリ。勿論先方側トシテモ輸入商ノ缺損、砂糖棚上等ノ尻ヲ背負ヒ込ミ居ルモノト察セラルル銀行ノ窮狀、其破綻ノ蘭印及本國經濟界ニ及ホスヘキ影響等ニ鑑ミ、減多ナコトハ致ササルヘキモ、其邊ノ兼合ヒ御如才ナク御考察ノ上、條約論モ適當ナル潮時ヲ見計ヒ可然打切ラレ、表裏兩面ノ工作ニ依リ會商善導方一層御努力相成度、萬事ニ御拔目アルヘキ筈無シト確信シ居ルモ右老婆心乍ラ申進ス。

返信

貴電ノ件全然同感、專門家委員會ノ設置モ其考量ニ基ク、但シ蘭人殊ニ當地ノ蘭人ハ最後ノ瞬間迄油斷ナラス、駄目モ押ス丈ケ押シ置ク要アリ、多少ノ延引ト相成ヘキモ謂フヘキ事ハ徹底的ニ表明セサルヲ得ス既ニ當方ノ關スル限り充分謂ヒ置キタルニ付、一週間先方ニモ冷靜考慮ノ餘地ヲ與ヘ、双方ノ主張ハ各保留シツツ、問題ノ具體的討議ニ入ル者ニテ旅行ヲ決行セリ。(感想ハ大毎ヲ見ラレヨ)從テ歸還後先ツ委員會構成ノ事ニ付「ラ」ト大使トノ私談ニ入ル様目下努力中ナリ。今後ハ委員會ニテ充分討論セシメ、行詰リタル時ニ「ラ」ト大使ト私談ニ入り展開策ヲ謀リ、一般委員會ハ形式的ノモノトスル考案ナリ。不取

敢當方代表ノ意中小生ヨリ内報ス。

第六章 「ジャヴァ」視察旅行ト共同委員會

「ジャヴァ」旅行感想

筆者ハ極メテ短時日ナガラ「ジャヴァ」各地ヲ巡視シテ大ニ啓發スル所ガアツタ。其感想ハ前記返電中ニ引證シタ大毎ノ記事ヲ殆ント盡キテ居ル。之ハ同新聞社ノ神田特派員ノ需メニ依リ、我々ノ感想ヲ木村顧問ガ書イタモノデ、即チ左ノ通りデアル。

長岡代表視察手記

今度ノ旅行ノ目的ハ、主トシテ在留邦人大部分ノ實情ヲ視察シテ、彼等ノ云ハント欲スルコトヲ聞カウトスルノガ、第一デアツタ。トコロガ如何ニモ三・四年コノ方ニ於ケル邦人小賣商・雜貨商ノ發展ノ狀況ガ著シイモノガアルトイフガ、コレヲ「ジャヴァ」全體ノ商業上ノ地位カラ見レバ、邦人ノ蘭印ニ於ケル經濟的進出ナド、大ゲサナ批評ハ、全ク當ラナイ。「バタヴキヤ」「バンドン」「スマラン」「スラバヤ」ノ如キ大都會ニ於テハ相當立派ニ店舗ヲ有シ居ルモ、少都市デハ支那人ノ小賣店ノ間ニ介在シ、シカモソノ數僅カニ一都市ニ一、二軒多クハ五軒位ニ過キナイモノカアル。而シテコレヲ邦人ハ、ソノ大多數ハ二十年、三十年來蘭印ニ生活シテ來テ、殆ント決死ノ覺悟ヲモツテ今日ノ基礎ヲヤウヤク築キ起ラタモノテ、